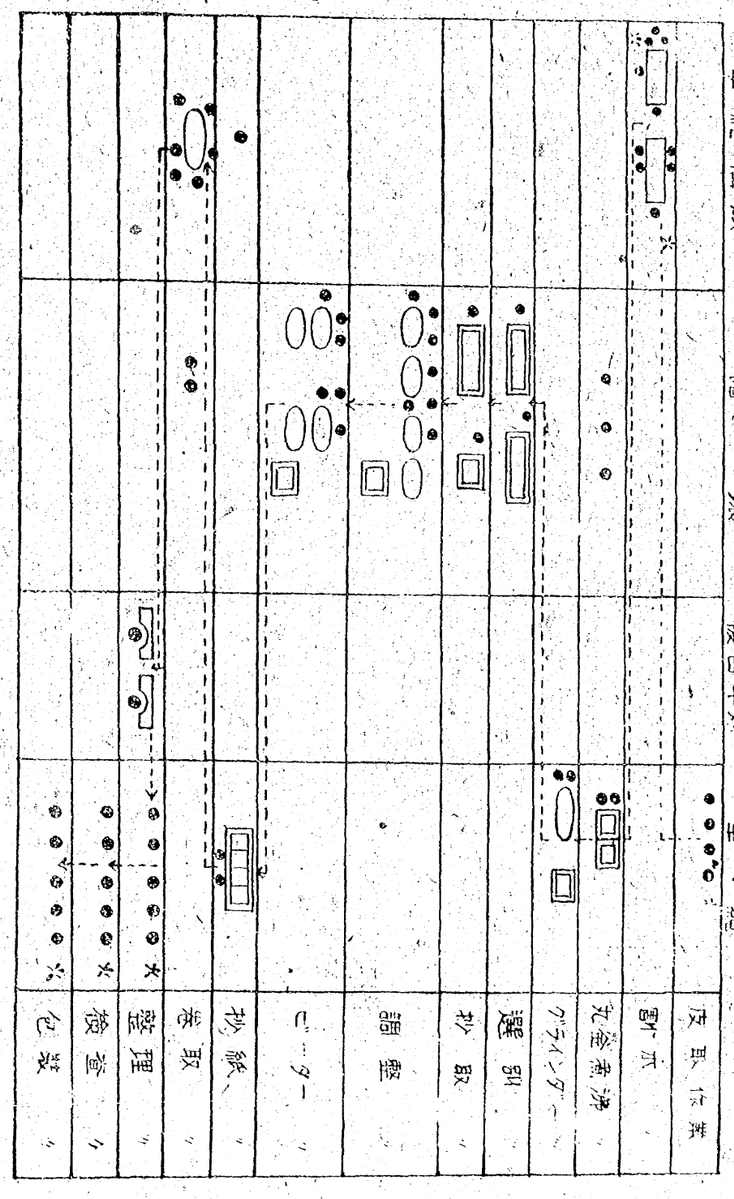
慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代経済学理論概況（昭和十七年六月二十五日慶應義塾経済学会講演）
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.8 (1942. 8) ,p.697(77)- 718(98)
JaLC DOI	10.14991/001.19420801-0077
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420801-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



現代經濟學理論概況

（昭和十七年六月二十五日慶應義塾經濟學會講演）

高橋誠一郎

今日、此の慶應義塾經濟學會改組後第一回例會に於きまして御報告申し上げる光榮をお與へ下さいましたことを、會長並びに會員諸君に厚く感謝致します。去月二十六日、本會發會式上、會長から私に課せられました報告題目は現代經濟學理論の概況であります。然るに、迂遠なる私の學究的興味は未だ十七世紀から十九世紀前半を低徊致して居りまして、現代を直視することが出來ずに居ります。私は到底此の課題に答へる資格のないものではありますが、平素、經濟原論及び經濟學史の講座を擔任して居りまする關係上、御辭退申し上ぐることを得ないで　遂にお引受け致した次第であります。尚ほ豫めお斷りして置かなければならぬことは、いくら概觀だけに止めるに致しましても、唯だ一回の御報告で、經濟學理論の全般に亙つて述べますることは甚だ困難と考へまするので、本回は四五の重要觀念に就いて申し上げるに止め度いと存じます。

一

十九世紀後半に於きまして、勞働階級の勃興と結び附いた諸問題の急迫並びに社會主義者及び其の他の者の著述

中に於ける其の理論的表現によりまして、幾多の經濟學者は彼れ等をして餘剰價値觀念を除去するが爲めに次第に勞働價値說を拋棄し、別箇の原理に依據するに至つたのであります。斯くして、限界效用價値論並びに限界生産力說は徐々に其の發達を見たのであります。限界效用學派は、彼れ等にして若し社會主義者等が其の過激なる思想を支持するが爲めに利用し得ない價値理論を發見することが出來ましたならば、彼れ等は社會主義的論據を說破し、現存經濟制度を是認するが爲めに極めて有利なる立場に立つことが出來ると考へました。彼れ等は、軈がて、ひとり社會主義者に對する十分なる回答たるばかりでなく、遍く一切の經濟問題に對する解決の鍵たる可きものを、あらゆる人が此の時に至る迄等閑視し其の眞意義を捕捉することの出來なかつた單純なる事實に於いて看出したと思惟したのであります。

他方に於きまして、同じく重大なる社會的危機の存在を痛切に知覺し、單なる自由放任主義によつて之れを解決し得ざることを信じながらも、急激なる革命的變化の可能であることをも、又、望ましいことをも信ずることがなく、且つ「賃銀鐵則」であるとか、「餘剰價値學說」であるとか云ふやうな、ラッサールやマルクスの「科學的」定則を以つて不正確なるものとして排斥する獨逸の歷史學派や講壇社會主義派は、其の發生以來、可なりに長い年月を經過したに拘らず、何等分類の合理的體系のない事實の蓄積、資料の蒐集以上に多く出ることが出來ず、未だ獨自の經濟理論を完成することがなかつたのであります。尤も、アードルッフ・ヴグナーは一千八百七十七年の頃に早く、其の Lehrbuch der politischen Oekonomie. の第一卷を構成する Allgemeine und theoretische Volkswirtschaftslehre. に於いて、重農學派及びアダム・スミスの其れに代る可き經濟學說の新殿堂の建築に着手致しましたし、又、ハインリッヒ・ディーツェルやウィルヘルム・レキシスも同樣の企圖に從事したのでありますが（Dietzel, Theoretische Socialökonomik, 1895; Lexis, Allgemeine Volkswirtschaftslehre, 1910.）、彼れ等は眞の歷史的方法に據るよりも、寧ろ舊態依然たる合理的方法に從ふ所の多いものでありまして、其の業績は著しく侵徹力に乏しいものと稱せられてゐます。グスタッフ・コーンの著 System der Nationalökonomie, ein Lesebuch für Studirende. の第一卷 Grundlegung der Nationalökonomie.（一千八百八十五年）の如きも、古い理論と新しい歷史的及び社會的傾向とを綜合しようとしたものでありまして、彼れの哲學的及び倫理的觀念を嚴密なる意義に於ける經濟的考察の上に優越せしめてゐます。何と申しましても、獨逸歷史學派の到達した最高頂を表示せる新時代の象徵、劃期的の大著と看做されましたものは、此の學派の總帥グスタッフ・シュモラーの Grundriss der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre.（一千九百年—四年）でありますが、此の書中に於ける純然たる經濟理論の論述は極めて貧弱であり、經濟法則の作用に對して與へられた範圍は頗る狹少であつたのであります。斯うした事情に由りまして、十九世紀の末期に於きましては、限界效用學說は斷然優勝するに至つたのであります。實に長い間、「限界效用理論」は即ち「經濟理論」と同義なるが如き觀を呈して居つたのであります。

然しながら。吾人は斯くの如き間に於きまして、價値に及ぼす生産費の影響が次第に重要視せられるに至つたことを認めなければなりません、劍橋學派の基を開いたアルフレッド・マーシャルは綜合主義者でありました。彼れに從ひますれば、ジェヴォンズが「考察と研究の反復は、余を導いて、價値は全然效用に依存すると云ふ稍や新奇な意見に到着せしめた」と道破致しました時、そは、不注意なる約言を以つて價値を生産費に依存するものとなした舊い經濟學者の意見よりも却つて一方的なものでありました。需要と生産費とが夫々價値決定に際して演ずる役割に關しまして、リカードオの曖昧朦朧とジェヴォンズの反撥とによつて生ぜしめられた不必要な論爭は、彼れに

よつて遂に片附けられたと言はれました。生産費の上に投ぜられた新しい光は、價値の決定に際して演じまする其の偉大なる役割を一層明瞭に悟了することを得せしめ、古典經濟學者等が、需要の力以上に供給の力を强調致しましたる時、彼れ等が其の直觀によつて正しく指導せられたことを一層確實に承認することを得せしめたのであります。而して、價値は需要及び供給の均衡點に於いて決定せられるとなす命題の基礎を成しつゝある一般觀念は擴張せられまして、經濟的宇宙の總べての諸要素が相互的釣合及び相互的作用によつて其の地位を持續する一の全コペルニコス的系統を發見するに至らしめらるゝものでありました。經濟的均衡の一般的理論は、二個の有力なる補助的概念、即ち「限界」及び「代位」によつて鞏固ならしめられ、思索の論理的方式として有效ならしめられました。而して、マーシャルが、ジェヴォンズ流の觀念から自然に發達せしめました「消費者餘剩」の概念は、自由放任、無拘束なる競爭によつて取得せられまする利益の最大限が、必ずしも取得し得る最大可能の利益でないことを立證するに資す可きものでありました。而して、レオン・ワルラスに遡ることの出來るローザンヌ學派は又、數理的均衡理論を構成するものでありまする。ワルラスは稀少性を以つて價格の決定原因たらしめるものではありましたが、而も彼れの中心學說を構成致しますものは一般的經濟均衡理論でありました。而して一千八百九十三年に彼れの後を繼承してローザンヌ大學教授となつた伊太利亞人ヴィルフレドォ・パレートォと共に眞に「ローザンヌ學派」と稱せられるものゝ發達は始つたのであります。ローザンヌ學派に取つての問題は、客觀的交換關係の其れでありまして、主觀的現象としての價値の其れは容易に除去せられるを得可きであります。

然るに、是れ等兩學派と鼎立の關係にある墺太利學派は供給曲線の反轉し得ることを認めて、依然、效用の優位を主張するものであります。二十世紀に這入つてから現れました此の學派の唯一の包括的著作でありまするフリートリッヒ・フォン・ヴィーザーの Grundriss der Sozialökonomik. 中の Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft.（一千九百十四年初版）の中心を成すものは依然限界效用理論でありました。

洵に、英國のアルフレッド・マーシャル、墺大利諸學者、及びローザンヌ學派、此の三つのものゝ業績は、現代の經濟學者に殘された直接の相續財産であると言はれてゐます。私は斯くの如き相續財産が其の後の經濟學者によつて如何に管理せられ、又增殖せられたかを少しく檢討して見たいと思ひます。

二

私共は、先づ第一に、其の後に至りまして、最早幾多の經濟學者を容易に別箇の學派に分割することを得ないやうになつた事實を注意しなければなりません。私共は輓近に於きましては、國民的並びに學派的境界を越えた結合の存することを看出すのであります。例へば、マーシャルの態度を承認せる牛津のエフ・ワイ・エッヂワースによつて初めて使用せられました無差別曲線を使用して、パレートォは效用の概念に依賴することなくして總べての經濟均衡の方程式を構成することが可能であることを示し、斯くて經濟理論を心理學的快樂主義に依存せしめることなからしめたのでありまするが、斯くの如きパレートォの無差別曲線體系の最重要なる發達は二人の英國人ヒックス（J. R. Hicks）及びアレン（R. G. D. Allen）によつて行はれました。（'A Reconsideration of the Theory of Value', Economica, 1934.）。又、初めに英國のフィリップ・エッチ・ウィックスチードの經濟思想に最大なる影響を及ぼしたものはジェヴォンズの The Theory of Political Economy. であつたのでありますが、初期墺太利學派、並びに一千九百〇六年にパレートォがミラノで出版致しました Manuale di economia politica. が現れまして後は、ローザンヌ學派も亦彼れに影響を與へる所が大でありました。彼れに對するパレートォの影響は、其の一千八

百八十八年の著 The Alphabet of Economic Science. Part I. Elements of the Theory of Value or Worth. と其の一千九百十年の著 The Common Sense of Political Economy including a study of the human basis of economic law. とを對照する事によつて最も明かに之れを認めることが出來るのであります。又、數學的方式化と墺太利學派の心理學的方法とを綜合しようとするの學は、瑞典ルンド大學の教授ヨハン・グスタフ・クヌート・ウィクゼルによつて行はれました。經濟理論家としての彼れは主としてワルラスとベーム・バヴァークの學徒であると言はれてゐます。(Über Wert, Kapital und Rente nach den neueren nationalökonomischen Theorien, 1893; Geldzins und Güterpreise. Eine Studie über die den Tauschwert des Geldes bestimmenden Ursachen, 1898.)。更らに、フェルリイン・シュツアルトは歴史學派の解釋と抽象的演繹的傾向との綜合を企圖するものではありましたが、其の理論を限界效用に基かしめて居りました。(Die Grundlagen der Volkswirtschaft, 1923.)。

洵に、以上三學派に屬する者の間に存して居つた初期の論爭は次第に緩和せられ、折衷的傾向が益々顯著ならうとしてゐるのでありますが、然しながら、他方に於いては、主觀的效用價値學說の命數が將さに盡きんとしつゝあるかの如き觀を呈し、之れを繞つて論爭の行はれた事實を注意しなければなりません。獨逸に在つては、歴史學派の殘存勢力並びに勞働階級運動の强大なる理論的、マルクス主義的基礎は新主觀主義の進路に横へられた重大なる障碍でありました。英國に於きましては、エヂンバラで講義をして居りましたマーシャルと同時代の老教授ジェ・エス・ニコルソンは效用遞減及び消費者餘剩の如き心理學的概念に反對し、其の鋒先をマーシャルに向けました。軈がて斯くの如き心理學的假定の必要を回避することの出來る方法で限界理論を表明しようとするの學が行はれました。ジェヴォンズ流の快樂主義は閉却せられ、若しくは全然拋棄せられるにすら至りました。彼れの快樂及び苦痛の算法は、市場によつて測定せられまするやうな收益及び費用の其れに變形せしめられました。ジェヴォンズの行つたやうに、麵麭の如き一貨物の連續的單位によつて與へられまする快感若しくは效用に於ける漸次的減少と之れを取得するが爲めに必要なる生産的活動から生じつゝある苦痛若しくは不效用の變化を示さうとする曲線を引く代りに、幾多の經濟學者は依然として曲線を使用しながらも、人々の感情よりも、寧ろ市場の事實を表示する旨を宣言致しました。斯くて、ストックホルム大學教授グスタフ・カッセル等はジェヴォンズ及び其の一黨の心理學に對して强烈なる批判を下しながら、限界原理に對して恭順を表することを得たのであります。而して、又獨逸のローベルト・リーフマンは效用と費用との間の相違から成る精神的收益の概念を構成し、收益が確められ得る所に於いてのみ唯り經濟的活動を承認し、而して、彼れの所謂限界收益均等法則(Gesetz vom Ausgleich der Grenzerträge)の上に其の價格理論を建設致しました。(Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1917-19.)。

然しながら、斯くの如くして、學界の一部には價値理論を葬り去つて、價格理論を以つて之れに代らしめようとする主張あるの時、クヌート・ウィックゼルは同國學者カッセルの意見に强く反對して、限界效用理論を擁護し、(Zur Verteidigung der Grenznutzenlehre, Zeitschrift für die Gesammte Staatswissenschaft, Bd. 56, 1900.)、オットー・ノイラートは理論經濟學に於ける價値理論の地位を系統的に研究し、(Nationalökonomie und Wertlehre, ein systematische Untersuchung, Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik, Bd. 20, 1911.)、ヘロー・メーラーは價値理論を擁護して效果を擧げ、(Die sozialökonomische Kategorie des Wertes, 1922.)、カール・ディールは瀕死の價値理論の爲めに辯じ、(Von der sterbenden Wertlehre, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich, N. F, Bd. 49. 1925.)、アンドレーアス・フォイクトは主觀的形態に於いて

價値理論を保持するに左袒致しました。（Wertürteile, Wertbegriffe und Werttheorien, Zeitschrift für die Gesammte Staatswissenschaft, Bd. 84, 1928.）。又、米國のツェット・シィ・ディッキンサン（Z. C. Dickinson）は、ヴェブレンの如き學者の攻擊に答へて、快樂主義的人間行爲の理論を放棄することなくして、心理學的方面から此の問題を檢討し、却つて快樂主義に有利なる一般的結論に到達致しました。（Economic Motives, a Study in the Psychological Foundations of Economical Theory with Some Reference to Other Social Sciences, 1922; The Relations of Recent Psychological Developments to Economic Theory, The Quarterly Journal of Economics, vol. 33 1918-19; Quantitative Methods in Psychological Economics, American Economic Review, vol. 14, 1924.）。

他方に於きましては又、理論的獨斷論による經濟學の停滯不振を攻擊するの聲も聞えました。曩きに一言致しましたエコルソンの如きも其の一人であります。（The Use and Abuse of Authority in Economics, The Economic Journal, vol. 13, 1903.）。彼れは數學的方法を承認することを得ないで、機に觸れて烈しく之れを攻擊するの學にすら出でたのであります。（The Vagaries of Recent Political Economy, The Quarterly Review, vol. 219, 1913.）。需要は複雜であると是れ等の經濟學者は言ふのであります。吾人は機會ある毎に利益の少ない投費を利益の多いものに代へて、是れからして最大なる滿足を得ようとする傾向のあることは事實でありますが、而も、吾人は或る物を購入する習慣になつて居りまするから、何等の考慮をも廻らすことなくして之れを購入する傾向のあることも亦事實であります。需要及び供給の兩者は自己を慣習的價格に適合せしめるものであり、慣習は又時代と共に變化します。彼れ等は限界學派の極端なる抽象に反對致します。彼れ等は更らに分量的、歸納的研究のより大なる使用を主張します。又、ソーアスタイン・バンド・ヴェブレンの如き米國の制度主義者は、均衡概念及び限界的方法は或る從屬的分析の目的の爲めには有用と看做されることを得可きでありまするが、根本的に正しい經濟現象の說明は社會制度の本質及び長い慣習によつて生じた力に依據してのみひとり可能であると信ずるのであります。

然しながら、パレートォは數理經濟學に對する反對論者に向ひまして、「嗚呼、哀れなるかな、數理經濟學は、少くとも、經濟現象の相互從屬の結果を大體に於いて了解せしめるに資するのでありまするが、汝等の喋々喃々は絕對に取るに足らぬものであることを示す」と申してゐます。（Trattato di sociologia generale, 1916, trans. A. Bongiorro and A. Livingston as 'The Mind and Society, 1935, vol. I.）。

獨逸のゴットル・オットリーエンフェルドは價値其の他あらゆる經濟學の抽象的獨斷論を攻擊し「經濟的ディメンション」の概念を以つて價値及び價格の其れに代らしめようと致しました。（Die wirtschaftliche Dimension. Eine Abrechnung mit der sterbenden Wertlehre, 1923.）。然しながら、カール・ムースは、價値の觀念が、結局に於いて彼れの經濟的ディメンションの概念中に含有せられてゐることを明かにしようとしました。（Die 'wertlose' Nationalökonomie, ein Auseinandersetzung mit Fr. von Gottl-Ottlienfeld, Jahrbücher für Nationalökoromie und Statistik, 3F., Bd. 74, 1928.）。ゴットルの新理論は又、アルフレット・アモンによつて痛烈に批評せられました。（'Wert', oder 'Wirtschaftliche Dimension'?, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 59, 1928.）。ヨーゼフ・バックは、ゴットル自身、其の毒々しく罵詈して居つた經濟理論の「言葉の拘束」（Wortgebundenheit）に陷つたものと做してゐます。（Der Streit um die nationalökonomische Wertlehre mit besonderer Berücksichtigung Gottls, 1926.）。

從來の經濟學は、大半、競爭の存在を推定するものでありまして、競爭が其の存在を見ない場合には、此の學問上に於ける主要なる法則の多くは無意義と化し去る可きであります。固より經濟學者は、早くから、自由競爭が普遍的でないことを感知して居つたのでありますが、資本の集中及び集積に連れ、自由競爭が獨占によつて代られるに至ると共に、彼れ等は次第に大なる注意を長期及び短期の獨占的狀態に拂ふに至りました。而して、實際經濟社會に於きましては、完全なる競爭から完全なる獨占に至る間に、種々なる不完全競爭及び不完全獨占の過渡的段階が存してゐます。斯く觀じますれば、競爭と獨占の兩者は相對概念であります。斯くて、限界理論を擴張して所謂不完全競爭をも包含せんとするの企圖が行はれたことをも注意しなければなりません。（P. Sraffa, The Laws of Return under Competitive Conditions, Economic Journal, 1926; E. H. Chamberlin, The Theory of Monopolistic Competition; Jean Robinson, The Economics of Imperfect Competition.）。

然も、社會は、次第に競爭的なると獨占的なるとを問はず市場の作用に對して不滿を示し、政府の規制が重要の地位を占めることゝなりました。其の結果は行政的價格決定の基礎に關する現時の論議中に現れてゐます。翼きに限界效用學派は經濟學の獨立性・自律性を主張して、彼れ等の科學から總べての形而上學的總念と共に公正價格の理念を驅逐致しました。國民經濟的動因は外界の自然が支配せられるに等しい自己に內在する特有の諸法則によつて規制せられると做すの信念が次第に有力となるに連れて、國民經濟學と倫理學との緊密なる關係は必然消失しなければならなかつたのであります。然しながら、國家は今や經濟價値の創造に於ける主要なる要素となりました。國家が其の國民の經濟生活に干涉す可きや否やは最早問題ではなく、如何に干涉す可きかが問題であります。果して然らば、交換價値は如何にして公正の原理と適合せしめらる可きであるかの問題が再び吾人の前に掲げられました。

たことは當然であると云はなければなりません。國家的價格統制の强化は、又、經濟學者をして集產主義經濟の下に於ける價値問題に興味を有するに至らしめました。夙にフリートリッヒ・フォン・ヴィーザーは限界的評價の原理は恰も個人主義的經濟と等しく、集產主義的經濟にも亦適用せらる可きものと觀ました。「社會的蓄積と欲望、若しくは社會的に相互に比較せられた財貨の高と效用が價値を決定する。吾人が展開せしめて來たやうな、評價の根本法則は、全社會に對して完全に且つ無制限に作用す可きである。と彼れは申してゐます。（Der Natürliche Werth. 1889.）。カッセルも亦、一般的な交換經濟に於いて見る價格形成の原理は社會主義社會に於いても作用す可きものと觀たのであります。（Theoretische Sozialökonomie, 1918.）。然しながら、墺太利の經濟學者ルートヴィッヒ・フォン・ミーゼスは、自由競爭が生產資源の科學的分配に取つて必要であることを主張致します。（Die Gemeinewirtschaft, 1922, trans. J. Kahane as Socialism, 1936）。

又、初め限界效用理論の信奉者であつた墺太利のオットマール・シュパンの如きは、後には其の均等重要性（Gleichgewichtigkeit）の有機的、全般主義的理論を通じて公正價格の概念に到達致しました。（Gleichwichtigkeit und Grenznutzen. Grundlegung der Preis und Verteilungslehre, Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, 3. F., Bd. 68, 1925.）。佛蘭西のヂュルヂュ・ヴァロアも亦、唯り生產費の程度に依存することを得る單一の公正なる正常價格を夢想致しました。（L'économie nouvele, 1919.）。米國人フランク・ハインマン・ナイトは、マーシャル及びクラークが、彼れ等の機械的經濟均衡に關する純乎たる經濟的見解から、正常價格の社會的及び倫理的要素を驅逐せるの故を以つて、彼れ等の態度を餘りに狹隘且つ人爲的に過ぐるものと考へ、價格の形成に作用する現實的經濟學の社會倫理的公準と、吾人が現代經濟學、特にアルフレッド・マーシャルに於いて看出すが如き純乎たる機

械的正常價格理論とを峻別致しました。(The Concept of Normal Price in Value and Distribution, The Quarterly Journal of Economics, vol. 32, 1917-1918.)。

「福利」(welfare)の觀念を經濟理論の中心たらしめました經濟學者に取つては、唯り經濟的問題であるばかりでなく又社會倫理的問題である福利を說明するが爲めには、價値の效用理論及び其の上に基礎を有する價格の貨幣理論は最早不充分なものとなりました。米のフランク・アルバート・フェッターは猶ほ其の結果に於いて限界效用の其れと密接に關聯した價値理論に依附するものではありますが、而も、彼れは之れを其の重要性に於いて第二級の經濟問題に貶下したのであります。而して、彼れは、限界效用價値理論の歷史的任務は、結局、單にカール・マルクス流の勞働價値學說を克服するに在つたと考へたのであります。(Value and Larger Economics, The Journal of Political Economy, vol. 31, 1923.)。

四

多大なる成功を以つて消費財價値の說明に適用せられました限界效用理論は直ちに勞働を包含する生產財に擴張せられ、軈て又、經濟的均衡理論に基礎を置いた分配理論が表明せられました。

勞働は消費財に於ける效用遞減の法則と同樣なる生產力遞減の法則に從ふものと看做され、賃銀は生產の恒久的要素としての勞働の最終生產力によつて決定せられると說かれました。此の學說は著しく其の信奉者の數を增加し、自由競爭の作用が完全無障である假想的、靜的、無摩擦的の狀態に於いては其の眞なるを認められなければならぬものと考へられました。然しながら、斯くの如き理論を特徵附けて居りまする抽象が果して效果のあるものであるか如何かゞ疑問とせられました。英國の經濟學者ジョン・アトキンソン・ホブソンは、賃銀が斯くの如く單純に生ずるものではなく、寧ろ、烈しい社會的鬪爭の結果であることの極めて多いものであることを指摘致しました。彼れは其の著 Work and Wealth. A Human Valuation. (一千九百十四年)に於いて、限界主義の論理的及び實際的缺陷を指摘致しました。又、生產手段の價格理論の直接基礎としては限界生產力理論を排斥しながらも、其の價値判斷の理論として之れを承認するものに和蘭人ウィレム・エル・ヴァルク博士がありました。(The Principles of Wages, 1928.)。

產業の全收益の如何なる配分が勞働力に赴くかの問題、即ち「一般賃銀」の問題から離れて、何故に勞働者の或る階級が他の階級よりも大なる所得を收受するやの問題、即ち「相對的賃銀」の問題が注意を惹きました。アダム・スミスの申して居りまするが如く、「人間は總べての荷物の中で最も運搬せられることの困難なるものである」。勞働は種々なる事情に基いて、最高の賃銀を取得する見込のある市場を求めようとする意志のない所謂「不動性」を有してゐます。賃銀の相違は勞働者移動の困難によつて永續します。近代に於ける賃銀決定に及ぼす習慣的生活標準並びに勞働組合の影響は、シドニィ及びビアトリース・ウェッブ夫妻の英國勞働市場の現實的研究によつて强調せられました。(Industrial Democracy, New ed. 1902.)。而して、吾人は他の方面に於けると等しく、勞働市場に於きましても、行政的規制が强化せられるに至つたことを認めなければなりません。

尙ほ一言しなければならぬことは、一般的賃銀理論として限界生產力說が事實上一般的承認を受けるに至つたことは前述の如くでありまするが、而も、他方に於いて長く英國經濟學界を支配して居つた「賃銀基金說」が猶ほ長く其の命脈を維持し、綸令ひ部分的には重大なる修正を加へられたとは云ひながら、未だ幾多の有力なる學者によつて支持せられてゐることであります。ハーバード大學教授エフ・グブルナー・タウシッグが其の Wages and Capital.

An Examination of the Wage Fund Doctrine, 1899. に於いて主張致しまする所は、「眞實賃銀」即ち勞働者が其の貨幣賃銀を費す際に取得する財貨及び勤務は、如何なる時に於いても、其の高に於いて一定のものであると云ふに在るのであります。貨幣賃銀に於ける騰貴はひとり賃銀取得者によつて購入せられる貨物に對するより高い價格水準に於いてのみ反映せられるのでありまして、眞實賃銀率に於ける何等かの增加によるものではないのであります。之れに反し、貨幣賃銀の下落は勞働者によつて購入せられまする財貨及び勤務の價格を引下げ、斯くて眞實賃銀は依然として變ることがないのであります。コンネチカット州ハートフォードのツリニティ・コレッヂのヂ・エー・クリーン教授も亦、一種の賃銀基金說を表明致しました。（Profit and Wages. A Study in the Distribution of Income, 1919.）。後者は恐らく前者によつて示唆を受けたものでありませうが、而も、クウシッグは悉くクリーンに贊することを得ざるものでありました。（Kleene's Profit and Wages, The Quarterly Journal of Economics, vol. 31, 1916-1917.）。

五

次ぎに地代學說に就いて唯だ一言致します。本世紀に這入りましても、前世紀末に行はれた地代概念の普遍化、並びに「眞のレント」と「准レント」の區別以上に多くの發達を見ることは出來ないやうであります。

賃銀は或る人が無地代地を耕作するによつて生ずる產物によつて決定せられると云ふ單稅主義者ヘンリィ・ヂョーヂの學說によりまして多大なる示唆を受け、限界生產力說を表明したものがジョン・ベーツ・クラークであります。クラークの所謂靜的狀態に於いては、生產の諸要素は其の最終若しくは限界的增加量の生產性に相應する配分を收受するものであつて、其の過程は一の自然法によつて統御せられるものと觀るのであります。あらゆる單位を同質ならしめまするが爲めに土地及び資本は抽象的なる可動性の資本基金（社會資本）に、勞働は生產力單位（社會的勞働）に歸せしめられます。而して、如何なる要素の單位の特殊產物も限界に歸するによつて分離せられるを得可きであります。ウィックスチードは生產の諸要素を、土地、勞働及び資本と做す通俗的區分若しくは分類が理論的見地からしまするならば甚しく不滿足であることを認め、縱令ひ吾人が滿足に生產の諸要素を列擧し、分類する程度に成功することが出來たとしましても、斯くの如き區分は何等理論的重要性を有する事がないであらうと觀たのであります。而して、是れ等の諸學者の屬して居りまする限界學派に從ひますれば、土地、勞働及び資本は總べて或る程度まで稀少であり、其の各々は其の生產要素の附加的單位が其の費用以上に收益を與へることのない點に至りまする迄生產過程に利用せられます。總べての要素は品質的相違を示します。恰も或る土地が他の土地よりも良好であると等しく、或る勞働者は他の勞働者よりも優り、又、或る機械は他の機械よりも有效であります。競爭はより有效なる要素をして、是れ等のものが土地であると、勞働であると、又資本であるとを問はず、一層高い割合に於いて報酬を與へる傾向があるのであります。そこで、リカードオの云ふやうな地代原理は一般原理であつて、特に土地に適用せらる可きものではないと觀るのであります。然るに、マーシャルは、自然的土地と他の富との間の區別が個人的投資者の見地からは拋棄せられなければならぬことを認めまするが、社會的見地からは之れを保留することを提言したのであります。而して彼れは眞のレントと准レントとの間に重要なる相違の存することを認めました。カッセルは土地生產物に對する需要の增加に對して土地の稀少なるの事實によつて生ずる地代即ち稀少地代（Knappheitsrente）を差益地代（Differentialrente）に對立せしめてゐますが、果して地代學說史上に那邊まで進歩を來さしめたものであるかは疑問であります。佛蘭西のランドリィは、地代概念の擴張並びに特殊の消費者餘剩の

觀念を排斥致しまして、傳統的意味に於いて地代を分析しようと致しました。

最近に於きまして、攻府の力によつて地代規制を行はんとするの傾向が大となりましたが、然しながら、此の方面に於ける規制理論はまだ系統化せられて居らぬやうであります。

六

轉じて利子學說を見ます。前世界大戰前に於ける利子論爭はベーム・バヴァークの「時差說」（アーデオー・テオリィ）、即ち利子を以つて、將來財と比較せられました時に現在財の受ける價値時差、プレミアム若しくは agio と見做す學說を中心として居つたやうに見えました。彼れの時差說を奉ずる米國學者とクラーク流の生產力說を奉ずる同國學者とは一大論戰を展開せしめたのでありました。然しながら、ベームの理論は將來財に比して現在財に對する選擇に基礎を有するが如くでありますが、而も、彼れが、現在財が將來財よりも高く評價せられる三つの理由、即ち（一）人々をして其の將來の欲求の强度を心に描くことを妨げる想像力の缺乏（二）彼れ等をして其の現在の渴望を阻止することを得ざらしめる性格の弱さ、及び（三）現在財が將來に於いてより多くの財貨を存在するを得せしめるに基く其の優越性の中で、少くとも短時的見地からは、第三の生產的拋資の可能性が最も重要であり、彼れによつて最も强調せられてゐるに徵して、事實生產力說であることが明かでありませう。彼れは資本的生產を以つて、主として直接的生產方法に代ふるに間接的若しくは「迂回的」生產方法を以つてするを意味し、第一次的要素使用の能率增加を來さしめる結果を有する生產過程の時間的增加と解釋するのであります。勞働は資本によつて援助せられまする際には、無資本勞働よりも多くを生產することが出來ます。斯くて、其の資本は、將來に於ける、例へば翌年に於ける同一高の資本よりも大なる現在的價値を有するのであります。今年に於ける一定額の資本は一箇年以後に於ける同一額と同價ではなくして、之れと、之れによつて其の間に生ぜしめることの出來る生產物の形態に於ける餘分の或るものを加へたものに等しいのであります。即ち、資本が生產的であるが故に、現在財は將來財よりも大なる價値を有するのであります。然らば、利率は何によつて決定せられますか。彼れは爰に生產力遞減の概念を導入致します。利率は、それが生產に使用せられた資本の最後の增加量の產物を超過しない底のものでなければなりません。斯くの如きベームの時差說に對して批評を行つた者の多くは、其の最弱點が迂回生產のより大なる生產力に關する原理であることを看取し、此の點に向つて其の攻擊の砲火を集中せしめました。エリック・フォン・ジフェルスは其の Die Zinstheorie Eugen von Böhm-Bawerks im Lichte der deutschen Kritik.（一千九百二十四年）に於いて、ベームの理論に對する獨逸學者の批評を考察してゐます。

ベーム・バヴァークの理論は特に米國に於いて大なる影響を有して居りました。アーヴィング・フィッシャーは一千九百〇七年に The Rate of Interest を出し、更らに同三十年に The Theory of Interest を公に致しまして、更らに完全なる發達を利子の限界理論に與へました。佛國に於きましては、アドルフ・ランドリィが同一の寄與を行ひました。（L'intérêt du capital, 1904.）。彼れ等に從ひますれば、人々は限界效用、即ち投費の限界的若しくは最後の項目によつて生ぜしめられる效用が種々なる時期に於いて等しくなるやうに彼れ等の投費を時間の上に調整しようとします。消費力が初期から後期に移される時に節約は生じます。借入は反對の方向に於ける變更を表示します。斯くの如き移動は豫期せられた欲望の變化に基くを得可きであります。移動は又資源又は所得に於ける期待せられた變化によつて說明せられます。斯くの如き要因に對するに非ざれば、人々を節約せしめるが爲めには彼れ等は補償せられなければならぬであらうと云ふ結論に到達するを得可きであります。例へば、現在一箇年五千圓の

所得を有する人が後年に於いて消費するが爲めに或る年に一千圓を節約するとします。節約を行ひまする年には、彼れの所得は四千圓に減少します。其の節約高が消費せられまする際には、彼れの所得は六千圓に增加します。是れ等兩時期に於いて彼れの欲望が同一であると假定しまするならば、四千圓から五千圓までの所得は五千圓と六千圓の間の其れよりも大なる效用を有してゐます。斯くて、效用の喪失が節約の過程から生ずることゝなるのであります。同樣のことは將來の所得を豫期して行はれる借入に就いても云へるのであります。利率は斯くの如く說明せられた貸借を均等ならしめる所のものであります。斯う云ふ風に述べられました時には、資本の生產力と殆んど何等の關係も存することがないやうでありまします。然しながら、生產力は現在と將來の效用の間の關係に影響いたしますが故に、そは單に外觀的に過ぎぬものであります。

斯くの如き理論に對しまして、吾人は屢々何等蓄積せられた資本其の者を消費するの意志なくして、將來に於いて拋資所得を收受するが爲めに貯蓄するの事實が指摘せられます。（F. H. Knight, The Quantity of Capital and the Rate of Interest, The Journal of Political Economy, Chicago, 1936.）。

而して、ウィックスチッドの如きは、先づ或る者の欲望の最大且つ最良の滿足と或る者の所得の流れの間の關係を注意するを以つて其の利子論を始めるのでありますが、他方に於いて、エッチ・ジェー・グヴェンポートやカッセルのやうな他の限界學派に屬する人々は非心理的說明に赴いてゐます。（Davenport, The Economics of Enterprise, 1913, p. 363.）。然しながら、是れ等の諸學者の理論と雖も、心理的說明から完全に脫却せるものではないと言はれてゐます。カッセルは一千九百〇三年版 The Nature and Necessity of Interest. に於いて、價格としての利子を論じました。彼れは特異なる形狀の資本供給曲線を描きました。彼れは利率が其の普通の限界內に於いて動搖する間は、即ち凡そ二分五厘の利率以上に於いては、其の變化が資本の形成に及ぼす影響は全體に於いて甚しく明白なるを得ざるものであると論結します。

最近に於いては、注意はヨーゼッフ・アー・シュムペーターの動態利子理論に集中せられた觀があります。（Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. (2 Aufl., 1926.)）。即ち、利子を以つて主として動態經濟に屬するものと觀るものであります。然しながら、靜態に於いては利率は零となると說く彼れの推定の理由を認めることは困難とせられてゐます。ゲェー・ハインツェは、利子が動態經濟に於けると等しく靜態經濟に於いても存在することを論證せんと試みました。（Statische und dynamische Zinstheorie, (1928.)）。

短期に關しましては、經濟學者は久しく利率は金融市場の狀況によつて支配せられることを認めて參りました。最近に於きましてジェー・エム・ケーンズは、利率を決定する所のものは、現金及び銀行預金の如き流動性を有する形態に於いて資金を保有すると投資物を所有するとの間に人々の行ふ選擇、即ち流動性選擇（liquidity preference）であるとなす所謂流動性說（liquidity theory）を提唱致しました。人々が現金の乏しい市場に於いて其の投資物を賣つて、之れを流動資金に換へようとするならば、投資物の價値は下り、利子は上ります。他方に於いて、流動資金が豐富ならしめられるならば、利子は低減せらるゝを得るのであります。（The General Theory of Employment, Interest and Money, 1936.）。

七

最後に利潤に轉じます。私が近く他の機會に述べました如く、前世紀末に於きましては、利潤を以つて、ひとり企業の所有者によつてのみ提供せられることの出來るものであつて、賃銀又は給料の形態に於いて支拂はれることと

の出來ぬ一特殊形態の勤務に對する報酬と同一視しようとする說に對しまして、利潤を以つて短期的現象と看做し、正常なる均衡狀態に在つては存在し得ないものと觀るの說が生じてゐました。クラークの言葉を以つてしまするならば、利潤は企業家が之れを掴みましても、維持することの出來ない逃避的な高でありまして、やがて彼れ等の指から逃れて社會全員の上に授けられるのであります。クラークの說は、多數の遵奉者を出したのでありますが、殊にセリグマンのやうなコロンビア學派によつて祖述せられました。クラークと好箇の對照をなす英のマーシャルは利潤が存在する短期の考察に更らに大なる注意を拂ひました。エッヂワースは又、競爭の制度が普遍的ではないのでありますから、獨占、殊に、緊密なる企業家の聯合が鞏固なる勞働組合に對峙する際の如き兩側の獨占を考察するの要あるものと觀ました。而して、彼れは、利潤が恐らくは限界生產力と精確に一致するを得さる可きことを立證したのであります。（The Theory of Distribution, in Papers relating to Political Economy, vol I, 1925.）。

之れと同時に利潤の獨占說も亦、相當有力に主張せられて居りました。倫敦經濟學校のモーリス・ドッブは全然獨占所得として利潤を論じ（Capitalist Enterprise and Social Progress, 1925.）、曩きに其の名を揭げました佛のランドリィも、主として獨占說を主張し、企業家獨占の基礎を單に社會的權力狀態ばかりでなく、同一人格に於ける資本及び管理能力の比較的稀有なる聯結に看出し、（L'intérêt du capital, 1904.）、又、米のチャールズ・グブルユー・マックファーレンは卓越した企業家によつて收受されまする差別的報酬の實在を承認したのでありまするが、而も是れ等のものは「企業家レント」と稱せらる可きものであつて、利潤なる名辭は價格の決定に參加する獨占的餘剩に限定せらる可きことを主張致しました。（Value and Distribution, an historical, critical and constructive study in Economic theory, 1899.）。

然るにカッセルの理論はマーシャルの其れと等しく一種の地代學說と稱せられ得可きものであります。シュムペーター、アルフレッド・アモン及びフランツ・オッペンハイマーは特に社會の動態的性格に基くものとして利潤論を發達せしめました。利潤を以つて危險に對する支拂ひとなすの理論はエッチ・シィ・エメリィ（The Place of the Speculator in the Theory of Distribution, Publications of American Economic Association, Ser. 3, vol. I, 1900.）、エフ・ビィ・ホーリィ（Enterprise and Profit, The Quarterly Journal of Economics, vol. 15; 1900-1901; Reply to Final Objections to the Risk Theory of Profits, ibid.; Enterprise and the Productive Process, 1907.）其の他の人々によつて主張せられました。而して又、危險、經濟的變化及び企業能力の役割の概念を結合した利潤觀はシカゴ大學のフランク・エッチ・ナイトによつて生み出されました。（Risk, Uncertainty and Profit, 1921.）。

現在に於いては、投下資本及び指揮的勞働に對する適度の報酬以上に利潤の正當性は何處まで承認せらる可きであるかの問題が生じてゐます。殊に戰時に於いては、軍需品に對する需要の緊迫性其の他の原因に基いて跳躍する異常なる利潤に對する統制の問題を緊切ならしめます。

八

最初に申し上げました前世紀末に於ける三大學派によつて殘されました經濟學的遺產は其の後、半世紀を經過したに拘らず、其の增殖はさまで著しくはなかつたやうであります。殊に最近に於いては政治的經濟方面が强調せられ、此の方面の課稅が寄重となりましたが爲めに其の發達を阻害せられる所が多かつたやうであります。今次の世界大戰が果して如何なる變革若しくは發展を經濟學理論の上に及ぼす可きであるかに就きましては、固より今の私は申し上ぐ可き何物をも有して居りません。オットー・ノイラートは前大戰直前から「特殊學科」（Sonderdisziplin）

として戰爭經濟學を要求して居つたのでありますが、フランツ・オイレンブルクは、戰爭經濟を以つて一般經濟の單なる變更に過ぎないものと見てゐます。戰爭經濟學に眞實の理論的基礎が有るか如何か、戰時經濟現象は單だに經濟政策のみではなく、果して經濟理論をも動かすものであるか如何かは、疑問であります。

是れを以つて此の蕪雜至極な報告を終ることゝします。御淸聽を深く感謝致します。

ジョン・ウォルター・ウッド著

「空港——設計諸要素の一端と將來の發展」

John Walter Wood: Airports. Some elements of design and futur development. New York, Coward-McCann Inc. 1940. pp. xvi, 364. Plates, 62.

三邊淸一郎

空港の施設と設計が航空輸送の急速な發展に伴つて居ない。現存のアメリカ及びヨーロッパの空港はすべて現狀に不適當である。原因は、その設計が地均し、排水、離着陸區域の照明。滑走路、諸建築物の構造、その他必要設備の設計が個々別々に、關係なく考へられてゐる事實に基くところが多い。これ等の諸要素は、設計の初めに於いて、將來の發展を稽へて、充分包括的な、伸縮性ある　緊密な計畫がたてられて居らねばならない。この見地から空港の設計に關し全般に通ずる原理的體系を樹てゝ見たいといふのが著者の本書に企圖するところである。

本書は三部に分ち、第一部では空港の諸要件を、第二部では南北アメリカ及びヨーロッパの四十八空港の比較を、そして第三部では自己の提案として「輸送管理、擴張可能空港案」なるものを論じてゐる。

第一部で著者は空港計畫は大略次の四階段に分たれるものとする。

「空港—設計諸要素の一端と將來の發展」